

増田美佳スコア「あたたかな顔」

俳句 阿部青鞋 あべせいあい (1914～1989)

暁光堂俳句文庫 阿部青鞋俳句全集より

てのひらをしたへ向ければ我が下あり
手の甲は自由にならぬところかな
なか指にしばらく水を飲ませけり
手の腹はまだよく知らぬところかな
合掌をひらいて曼珠沙華にする
親指をとじこめてみる指のなか
要するに爪がいちばんよくのびる
あたたかに顔を撫ずればどくろあり
心臓は能無しにしてうごきけり
アンドロメダ星雲の如しわが舌は
ひたいから嬉しくなりてきたりけり
虹の死に場所だとおもふこめかみを
かかとかから聞こえてくるや青嵐
耳に当て握り拳の鳴りを聴く
わがあしを門かと思いきまりはて
ちってくる木の葉を骨がまず感じ
足あげたまま永久に汐干狩
ひるねからさめたるうしろ頭かな
筋肉が緊張すればすみれ咲く
かいまみるわが腋毛のまけおしみ

うろうろと鏡のなかを又あるく
きぬぎぬのおみなのにぎりこぶしかな
わがにぎりこぶしの中は見しことなし
人間を撲つ音だけが書いてある
手について涼しき路を歩かばや
足うらをさびしい天に向けてやる
人間の 一部始終の鼻のあな
手指には夢見るかたちさせておく
握手して互いにはなす刻を待つ
あたたかいのどを鏡にうつしてみる
ひたいからひつぎぐるまが出るところ
われというものは単なる唾液にて
静かさや鼻の下から雪がふる
両眼をおさへて夏に入りにつけり
ひとりみるつちふまずはよきところ
地に耳を当ててきくべきこともなく
運ばんとわが身を独り折りたたむ
なつかしくなるまでからだ縮めをり
結局はさびしがりやの筋肉よ
わざわいを招かんとわれ立ちあがる

句を動きに変換するときは、あまりそれぞれの動きを作り込まず、さっとすくい取るように心がける。

